

韓国での出会い、発見、そして歓び

文教育学部言語文化学科2年

土屋 真美

1. 参加の動機・目的

私がこの実習に参加した最も大きな理由は、自分自身が海外へ出た経験が無いということです。私は19年間日本国内に留まっていることには何ら不満を感じていませんでしたが、自分自身の専攻分野の学習を進めるにつれ、「もっとグローバルな視野で世界について考える力をつけたい」という思いが湧いてきました。また、自分の将来像を描くうえで「様々な国籍の人々の価値観や生き方に触れたい」と思うようになりました。そんな自分にとって、この実習は自分自身の肌で異国の空気を感じ、人々に触れ、世界の国々はもちろんのこと、母国である日本という国を客観的に見ることができ、多様な価値観を持つ人々のなかに身を置くことのできる絶好のチャンスだと思いました。

「多国籍の人々を交わることで、世界の国々や母国の日本をグローバルな視点で客観的に見る力を養う方法をつかむ」ことが私のこの実習での目的でした。

2. 成果

i 多文化交流実習 I

このプログラムでは、午前中は英語による国際政経の授業を履修しました。この授業は、国際関係を政治経済現象との組み合わせで分析する IPE(International Political Economy)について、その柱となる3つの理論を学び、アジア通貨危機やサブプライムローン問題などの過去に生じた歴史的な経済的出来事を分析したり、全世界的な南北格差への対処方法を考えたりと、まさに国際的な内容の授業となりました。毎回の授業で、まず前半の一時間半は講師による講義を受け、後半は講師によって与えられた議題についてグループにわかれてディスカッションをし、導いた意見をクラス全体へ向けてプレゼンし、クラス全体で問題への危機意識やその問題への対処方法、そこに生ずる自分たちの責任を共有する、という流れとなりました。

私自身は国際政経学を約3時間みっちり英語による授業で学ぶことは初めての体験だったうえ、授業内容は極めて細かい専門知識が要求される部分もあり、悪戦苦闘の連続でした。自分自身の知識や英語力の不足を実感し、毎回の授業への予習は毎日3時間ほどかかりました。

しかし、悪戦苦闘する日々のなかでも新たな発見は幾多もありました。まず一つ目が、自分の考えがかなり日本国内のメディアや大衆の意見に影響されており、真に現実を捉えることができていなかったという点です。例えば中国が抱える問題についてです。日本人の、中国は環境問題に対して非常に消極的な姿勢をとっているという考えや、中国の安全基準は非常に低く、中国産の製品は危険だという考えに対して中国人の学生は強く抗議し、その根拠を実に説得力をもって説明してくれました。それを聞いて私は、自分のなかに半ば自然発生的に反中国的な感情が存在していたことを実感しました。しかしそれは、メディアや大衆の意見に操作されただけのまったく真実性のないものであり、自分自身で真実を追究しようと調査や研究することを怠った結果、そのような反中国的な疑いを中国へ抱いていたことが非常に申し訳なく感じられました。そして、私のような考えを勝手に抱いている人

が日本国内にどれだけいるだろうと思うと、日本という国を非常に情けなく感じました。目の前の問題に関してメディアや大衆の意見に左右されず、しっかりと自分自身で危機意識をもって調査・研究するという学問の意義を改めて再認識することができました。

また、自分の専攻分野についての意識にも変化がありました。私は発展途上国の難民問題や劣悪な労働環境、内戦、飢餓などの諸問題に通ずる貧困を改善するために必要な実践的な協力の形について研究したいと構想を練っていました。しかし今回の授業で学ぶにつれて、発展途上国が貧困国から抜け出し、さらに産業的に「発展」することはその国にとってプラスとなり得るのか、それが世界平和につながるのか、という疑問が自分のなかで浮かび上がってきました。実際に産業的に発展を遂げた先進国は、自国の利益追求ばかりで世界平和のための先進国としての役割を果たせていない面が多々あるうえ、世界の国々の工業化には環境問題という課題が立ちはだかっています。途上国が貧困からの脱却を進め、その先にある工業発展の弊害を最大限抑えるために国際協力に求められるタスクとは何なのか。この問題の答えを自分なりに調査・研究して導き出すためにも、これから様々な国へ留学することによってより多角的に問題について考える力を養いたいと感じました。

ii 多文化交流実習Ⅱ

午後の授業では、約3時間韓国人講師による韓国語の授業を履修しました。韓国語は日本語と文法が同じで、単語の発音も日本語を共通する部分が多いので、非常に学習しやすかったです。自分で勉強したぶんだけスキルが向上していくのが実感でき、モチベーションも高く保つことができました。

今回韓国語を学んで感じたことは、外国語を学ぶ際には文法や書く力も大切ですが、それより第一に外国語を話す力を養うことに重点を置くべきだということです。今回のプログラムで最も話されたのは英語ですが、他国の人々と比べて日本人の英語力の乏しさが非常に目立っていました。国際舞台で最も必要なツールはコミュニケーション能力です。日本人にはそれが大きく欠けてしまっていると実感しました。特に近年では多国籍企業が主要化し、英語が公用化する企業や外国人を採用する企業が急増しています。そのようななかで英語力の乏しい日本人は明らかに外国に遅れをとってしまっていると思います。このような事態を打開するために、日本の英語教育の方向性を変える必要があるのではないかと強く感じました。

iii ショートビジットで学んだこと

今回の実習全般から学んだことを述べます。

① 日本人の消極性 他国の勢い

今回の実習を通して、各国の国民性というものを感じる場面が多々ありました。例えば授業に取り組む姿勢の違いです。国際政経の授業のディスカッションの際に、日本人学生は積極的に自分から意見を述べるのがほとんどなく、静かに相手の意見を聞きながらうなずくだけ、という場面がよく見られました。「日本人は何を考えているかよくわからない」と外国人が言うのをよく聞きますが、確かにそうだと思います。日本人学生はより明確に自分の意見を持ち、それを自分から周りへ発信し、議論を重ねてより深い学びへとつなげていく意欲を持つべきだと感じました。

② 本気で議論することの楽しさ

国際政経学の授業では毎回小グループに分かれて議題に関してディスカッションを行いました。それぞれの議題は国際政治・経済に関わる内容を含んでおり、多国籍なグループで全世界的なテーマの議題について討論することは非常に興味深かったです。

時には特定の国に対する厳しい非難の声があがり、教室に緊張が走ることもありましたが、国際理解にはそのような衝突を乗り越える必要もあると実感しました。

あるテーマについて本気で話し合いぬくというのはそれなりに労力を必要とするものですが、様々な人の考え方に共感したり抗議したりすることを重ねてその先にある真実にたどり着く過程を楽しむことができ、本気で議論することの楽しさ、歓びというものを実感できました。自分と同じように国際社会に問題意識を持ち、熱い心を持って本気で討論できる仲間と出会えたことに本当に感謝しています。

③ 韓国文化の魅力

今回の実習では約3週間韓国に滞在しました。そのなかで、韓国の文化、国民性というものを肌で実感することができました。

私にとって最も魅力的に感じられたのは、韓国人の「心的距離の近さ」です。こちらが日本人で、韓国語をよく話せないとわかっていても平気でペラペラと陽気に話しかけてくれる近所のホットク屋のおばさんには本当に驚きました。誰に対しても変に気を遣わず親切に接する温かさが韓国人にはありました。そして、「コミュニケーションの豊富さ」も大きな特徴でした。電車内もしゃべり声でいっぱいです。私自身は韓国語があまり得意ではなかったのであまり話しかけられなかったのですが、韓国人には陽気に気軽に話しかける人が多く、話しかけられればこちらも自然と心が軽くなって自然と笑顔で会話が弾み、最後にはもう仲良しの友達同士になっているという場面が多くありました。言葉を交わすことの大切さをいうものを母国語の通じない異国で改めて実感できました。

④ 自分自身の学びへの姿勢の変化

今回の実習を通して自分自身の学びに対する取り組みにも変化が芽生えたと感じました。第一に、今回のプログラムで学習した国際政経学と韓国語に対する学習意欲が高まりました。特に国際政経学は自分自身の今後の研究活動にもおおいに生かせる分野なので、今回の授業で理解しきれなかった分野について自分で深く学びたいと思います。また、国際政経学や韓国語だけでなく今後の自分自身の研究分野に対する構想も深まったように思います。今後の調査・研究に、今回の実習での経験を生かしたいと思います。

学習意欲の高まりとともに、留学への関心も高まりました。言葉の壁、価値観の違いなどの困難は多いですが、様々な国籍の人々の価値観や生き方に触れ、今日の国際問題を今まで気づくことのなかった側面から見るなど、日本では体験できないような経験を重ねることによって自分自身の世界観が洗練されていく歓びを得られる留学というものに、強い魅力を感じるようになりました。

グローバル化した今日、国際社会で日本が果たすべき役割にもよりグローバルな視野が求められるようになりました。私は、留学などを通してさらに自分自身のスキルを高め、日本の次の時代を牽引していく原動力の一部になりたいと思います。